

九州大学 大学文書館ニュース

第35号

2010. 9. 30

目 次

九州大学男声合唱団コールアカデミーの 歴史と活動……………2	大学文書館日誌抄録……………6
百年史編集室のこれまでとこれから……………4	九州大学百年史編集小委員会名簿……………7
九州大学大学文書館委員会名簿……………6	九州大学百年史編集室名簿……………8
九州大学大学文書館名簿……………6	百年史編集室日誌抄録……………8



「九州大学男声合唱団コールアカデミー 追い出しコンパ」（1960年。於九州大学三畏閣）

九州大学箱崎地区にある第3学生集会所、通称「三畏閣」は1937年（昭和12）建築の木造2階建ての施設で、現在も学生たちの各種活動に利用されている。写真は1960年（昭和35）3月撮影で卒業生たちはネクタイ姿、鍋には当時まだ一般的だった七輪を使っている。この42畳の大集会室は懇親会などで最も利用されており、「昭和」の卒業生にとっては一度は訪れた経験がある場所だろう。うしろには戦前に九州帝国大学医学部に学んだ郭沫若が再訪時に揮毫した「実事求是 一九五五年冬」の額が見える。コールアカデミーに関する詳細は本号の山口英一「九州大学男声合唱団コールアカデミーの歴史と活動」を参照。

九州大学男声合唱団コールアカデミーの歴史と活動

山口 英一

九州大学男声合唱団コールアカデミーは1953年（昭和28）の創立以来、50年を越える活動の中で650名以上の卒業生を抱える学内でも歴史のある学生団体のひとつである。そして現在、多くのOBたちが現役学生との境なくメンバーとして歌い続けている。ここではその創設以前から今日に至るまでの大まかな歴史と活動を紹介したい。

1. 創立前史

九大コールアカデミーが現在の名称で活動を開始したのは戦後の学制改革で新制大学になって以降であるが、それ以前にも九大では男声合唱団の活動があった。1935年（昭和10）には西南学院大学グリークラブと九州帝国大学の男声合唱団が合同演奏会を行ったことが当時を知る西南グリークラブのOBによって記録されている¹⁾。

だが現在の九大コールアカデミーにつながる直接の活動は「旧制福岡高校音楽部」の創設である。伊都地区への移転で現在は閉鎖されている九州大学六本松地区にあったのが旧制福岡高校である。1945年（昭和20）の終戦によって通常の授業が再開され戦時中のさまざまな束縛から解放された学生たちが、教官室にグランドピアノがおいてあった当時の物理教官、園田久氏（のちの九大教養部物理学教授、現九州大学名誉教授）の元に「音楽」を楽しみたいとやってきた。それならば「楽器もいない合唱」はどうだ、とドイツの男声四部合唱曲集Liederschatz（「歌の宝」の意）からガリ版で刷った楽譜で、ゲーテの詩にウェルナーが曲を付けた「野薔薇Haidenröslein」を歌ったことが「旧制福高音楽部」のスタートであった、と園田氏自身が記している²⁾。それから1947年（昭和22）に始まった西部合唱コンクールなどで、戦地から復員した石丸寛氏が指揮する西南学院グリークラブと園田氏率いる福高音楽部は争い、時には合同演奏を行い、当時の福岡における合唱界の中核へと成長していった³⁾。まさに六本松地区正門左手に建つ記念碑「青陵の泉」のままの弊衣破帽の学生たちであったという。現在、コールアカデミーOB名簿の前には旧制福高23回生（昭和19年入学）から27回生までの66名が

「旧制福高音楽部OB」として列記されており、団員・OBは現在までそのバンカラ気質を受け継いでいると自負している。

2. コールアカデミーの創立

1949年（昭和24）の学制改革により旧制福岡高校は新制の九州大学の一部となり、その年4月に入学した旧制福高27回生は1年を終えた時点で新制大学への入学となった。その「旧制福高永遠の下級生」のひとりが九大コールアカデミーの生みの親であり、現在は日本指揮者協会会長を務める荒谷俊治氏であった。「九州大学大学図書館ニュース」第30号（2007.11）の松村晶氏による「創立100周年を迎える九大フィルハーモニー・オーケストラ」に記されているように、九大フィルを再興した石丸氏は福岡での音楽活動の興隆に力を入れていたが、1951年（昭和26）に活動拠点を東京へ移すにあたり、法学部学生であった荒谷氏を市民団体である福岡合唱協会の後任指揮者に指名した。それを機に荒谷氏は指揮者としての活動を本格化させ、学内にあったいくつかのグループに声をかけ全学的な組織として1953年（昭和28）12月6日に「九州大学コールアカデミー」が誕生した。当時は主としてドイツの合唱曲を原語で歌っており、大学の合唱団なのだからと団体の名前もドイツ語でChor Akademieと命名された。創立直後に箱崎地区の三畏閣で行われた「発会コンパ」の記念写真には40数名の顔が並んでいる。当時の練習会場は旧県庁（現在のアクロス）裏のアメリカ文化センター2階、福岡県警の柔道場、そして当時は第一分校と呼ばれていた六本松地区でピアノがあった物理学の園田研究室などが利用されていた。

創立から4年後の1957年（昭和32）1月13日、九大医学部講堂で「第1回定期演奏会」が開催される。約40名のコールアカデミー最初の単独演奏会は集客への不安もあり九大フィルの力を借りようと前半がピアノ伴奏の合唱、後半がオーケストラ演奏とオペラ合唱曲集の2部構成であった。その作戦が功を奏し、満席の来場者であった。以来毎年、1月に定期演奏会を行うことが恒例になっ

ている。

3. 育ての親、藤井凡大氏

現在まで続くコールアカデミーの歴史を語るには、生みの親、荒谷俊治氏と並んで育ての親、藤井凡大氏の存在を語らねばならない。荒谷氏と同期で1949年（昭和24）に旧制福高に入学し新制九州大学工学部造船学科に学んだ藤井氏は、幼少からの邦楽の素養を旧制福高音楽部と石丸氏・荒谷氏らとの音楽活動により広げ、1953年（昭和28）春の大学卒業を待たずに東京へ出て作曲活動を始め、のちにNHKの人形劇「新八犬伝」の音楽などで知られる作曲家になる。

東京で指揮者として本格的に活動していた荒谷氏を久しぶりに招いて1966年（昭和41）に「第10回記念定期演奏会」を開催したあと、荒谷氏から邦楽育成のため定期的に福岡を訪問していた藤井氏にコールアカデミーの指導を依頼したことがコールアカデミーの転機となった。藤井氏は1969年（昭和44）の定期演奏会で客演指揮、翌年には常任指揮者に就任し、1974年（昭和49）には学生たちが発案した初めての東京公演を、荒谷氏と共に「創立20周年記念演奏会」で実現する原動力となった。またこれを機に関東OB会が結成され、以来現役への強力な支援と独自の演奏会の開催など活動を継続している。

1975年（昭和50）の定期演奏会のあと2年間常任指揮者を離れていた藤井氏は復帰後、夏期特別音楽講座、俳句会や長崎、日田、対馬など九州各地で定期的な演奏活動などを企画し、その後のコールアカデミーの活動の幅を大きく広げる牽引役となった。刺激を受けた学生たちは1983年（昭和58）に「創立30周年記念演奏会」として東京・大阪・福岡での公演を成功させ、それと前後し、ジョイントコンサートとして毎年日本各地で演奏を行うことも恒例となった。

学内的には、藤井氏の治療でお世話になった九大医学部へヒポクラテスの歌、医学部愛唱歌集の作詞・作曲、CD制作や毎年の献体篤志者慰霊祭への献歌もコールアカデミーにとっての大切な活動として続けている。藤井氏は1994年（平成6）7月に逝去される直前まで、音楽に留まらず、あらゆる文化に目を開き「豊かな人」となるべきだと学生たちを鼓舞し、自身の行動で示してくれた。氏による数多くの愛唱歌集の作曲・編曲・出版はコールアカデミーにとっての大きな音楽的資産であると同時に、その全人的な教育は若い学



コールアカデミー第1回定期演奏会
(1957年(昭和32)1月13日。於九州大学医学部講堂)

指揮は荒谷俊治氏。学生たちでピアノを当時の医学部音楽室から運び込み、第2部の九大フィルとの競演のためにステージの拡張工事をしたという手作りの演奏会。

生たちに豊かな文化と広い世界を示してくれた。コールアカデミーにとって大恩の人である。

4. 50周年とその後

1953年の創立以来50年を迎えることを記念し、3つの大きな事業が行われた。まず2002年（平成14）11月に大韓民国ソウル市で延世大学校グリーククラブの定期演奏会に出演するという形で初の海外公演を実現した。現役・OB合わせて50数名が参加し、韓国語による伝統芸能を交えての演奏に会場は大興奮となった。続いて2004年（平成16）12月には『50周年記念誌』を刊行した。そしてメインイベントとして翌1月にアクロス福岡シンフォニーホールにて「創立50周年記念定期演奏会」を開催した。福岡OBフィルハーモニー・オーケストラらの賛助を受けて、創立者荒谷氏の指揮で福高音楽部以来のメンバー130名がケルビーニのレクイエム、オペラ合唱曲集を演奏し、50周年という慶事に満席の来場者から暖かい拍手を頂いた。

さらに2008年（平成20）9月には関東OB会の熱烈な支援によって「創立55周年記念東京公演」と題し、すみだトリフォニーホールでの140名を越えるメンバーによる公演を行うなど、現役・OBが一体となった演奏活動が続いている。現在は藤井氏の薫陶を受けたOBの横田諭氏が常任指揮者として学生たちを刺激し続けている。近年の学生団体の衰退に加え、伊都地区への移転に伴う部員減少などを不安視したOB会から「声出せ、金出せ、口出すな」を合言葉に現役学生への多方面の支援が行われていることも、このクラブの大きな特徴といえるであろう。

創立以来蓄えられてきた多くの楽譜、各種演奏会パンフレット、40年以上も発行している部誌『讃歌』のバックナンバーなどは、50周年記念誌の制作の際、九大学文書館への保管を承諾いただいた。学生団体の活動資料として活用いただければ幸いである。

〔参考資料〕

『九州大学男声合唱団コールアカデミー創立50周年記念誌 1953-2003』同OB会、2004.12

〔註〕

- 1) 山本昭輔「創立50周年おめでとう」『50周年記念誌』p.1が徳永麟之助（1909-2003）遺稿集『よろこびのうた』での記述に言及している。
- 2) 園田久「歴史の裏付け」『50周年記念誌』p.5。
- 3) 山本昭輔「九大ゴールアカデミー前史 [戦後旧制福岡高校音楽部の足跡]」『50周年記念誌』p.99-102。『旧制福高80周年記念誌 人生旅路 遠けれど』青陵会、2002.10への寄稿内容に加筆・訂正されたもの。

(有明工業高等専門学校一般教育科教授
／九大コールアカデミーOB会幹事)

百年史編集室のこれまでとこれから

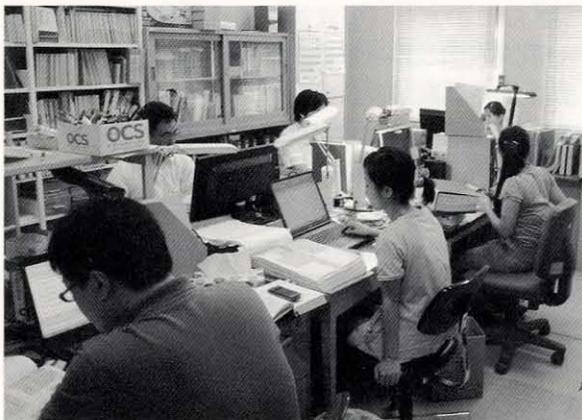
藤 岡 健太郎

大学文書館に百年史編集室が設置されておよそ1年半が経過した。『九州大学百年史』編集事業はまだ緒に就いたばかりという感もあるが、ここでこれまでの作業状況と今後の展望などを報告しておきたい。

編集室の体制

現在編集室には室長（兼任）1名、准教授1名、助教1名、テクニカルスタッフ3名（うち1名は部局史編担当）がおり、このほか数名の大学院生アルバイトを雇用して編集作業を行っている。

施設としては事務室・教員室・書庫がある。書庫には収集した史料が収められているが、百年史編集室としての史料収集はまだ始まったばかりということもあり、今のところスペースには余裕のある状態である。



事務室

作業の進捗状況と今後

あらゆる修史事業がそうであるように、『九州大学百年史』に関しても、まず必要なのは史料収集である。幸いにも九州大学においては過去に五十年史・七十五年史が刊行されており、その際収集された膨大な史料が大学文書館内に保存されている。また、七十五年史編集終了後に大学史料室が発足し、さらにそれが現在の大学文書館となり、その間にも廃棄文書や寄贈史料を中心とした史料収集が進められてきた。これらの史料については未整理のものもあり、どのような史料があるか、全体を把握する作業を現在進めているところである。

百年史編集のための重要作業のひとつとして位置づけているのが、評議会や教授会の議事録撮影である。これらは全学的な、あるいは各部局の動向を知るうえで最も重要な基礎史料である。既に五十年史・七十五年史編纂の際にそれまでの議事録は撮影されているので、現在は昭和61年度以降の議事録を対象に撮影と議題目録の作成を進めている。

撮影を始めて気づいたのが、これらの会議で配布される資料が年々急速に増大してきていることである。原因はパソコン（ワープロ）とコピー機の普及・性能向上であると考えてよいだろう。パソコンにより資料作成が容易になり、コピー機により大量の印刷が可能になった結果、配付資料は増大する一方である。当然撮影枚数も膨大なものになり、七十五年史編纂時の撮影枚数の数倍な

いし十数倍になることが確実である。

このことは、電子化で紙の量が減るなどということが、今のところは全くの見込み違いであることを如実に示している。ただ、iPadのようなタブレット型PCや電子書籍の技術の向上・機器の普及が進めば、次の百二十五年史か百五十年史の時には史料撮影の苦労もなくなるのかもしれない。

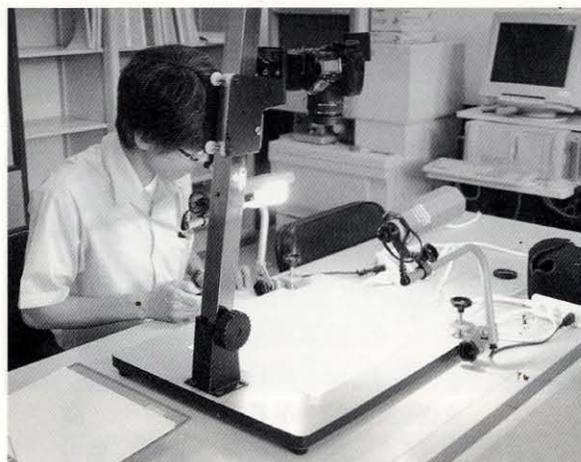
そのほかの作業として、広報などの学内刊行物や新聞記事のデータベース化も行っている。これらは学外への発信や学外から見た九大の状況を表すものであり、議事録からだけでは得られない数多くの情報を含んでいる。このデータベースについては編集室で利用するだけでなく、各部局にも提供し、部局史の編集にも役立てていただく予定である。また、資料編に掲載するデータとして、組織変遷図・人事一覧等のデータも収集・作成を進めている。

各編について

さて、『九州大学百年史』は通史編・部局史編・資料編・写真集から構成される。このうち部局史編に関しては、編集室で『九州大学百年史』部局史編編集マニュアル』を作成し、各部局に配布した。五十年史では「学術史」として部局史が刊行されたが、七十五年史では部局史編に相当するものが刊行されなかった。この間に独自に沿革史を刊行した部局等も少なくないが、多くの部局の教職員にとっては、今回が初の部局史編集となる。したがって部局史の編集とはいかなるものか、その作業の手順・方法を示すため、このマニュアルを作成した。

マニュアルに基づき、既にいくつかの部局では部局の編集委員会などの編集組織をつくっている。百年史編集室では新たに部局史編担当のテクニカルスタッフを採用し、各部局の編集作業に対して助言・支援を積極的に行っていくことにしている。

このように部局史編については編集に向けた各部局の作業が始まっている。一方通史編については、現在編集室で目次案を作成中である。七十五年史以降の25年間で特に重要な事項は、大学院重点化、法人化、キャンパス移転といったことになろう。加えて、九大の社会との関わり方、学生のあり方なども、この間に大きな変化が見られる。こうしたところに重点を置き、五十年史・七十五年史の内容も見直しつつ、新たな九大の通史を作り上げていきたいと考えている。また、五十年



議事録の撮影

史・七十五年史では旧制福岡高等学校・久留米高等工業学校（久留米工業専門学校）の歴史は取り上げられていなかったが、百年史ではこの両校も前身校として詳述する。もちろん、九州芸術工科大学についても通史編で詳述する方針である。

七十五年史以降の25年間で大学のあり方は大きく変わった。そしてそれを取り巻く高等教育政策や社会状況・価値観（大学とは何か？）も大きく変化している。学術研究が急速に進歩したことは言うまでもない。こうした学内外の変化を反映できるような内容とすることが、通史編のひとつの目標である。

資料編については、通史編の方向性に沿って掲載資料の収集・選定を行う予定である。特に統計等のデータについては、七十五年史の内容を基礎としつつ、新しいものを加えていきたいと考えている。

最後に写真集については、来年の創立百周年に向けて、現在編集作業が進められている。七十五年史の写真集では掲載されているのは建物や人物などの写真がほとんどすべてであったが、百年史の写真集では、そうした写真のほかに、公文書や新聞記事などの史料、建物の図面なども掲載する方針である。こうしたことで、よりバラエティに富み、九州大学の歴史に対する理解がより深まる内容にしたいと考えている。

最初にも述べたように、編集事業はまだ緒に就いたばかりである。関係者の皆様には資料提供など、今後ともご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

（九州大学大学図書館准教授）

九州大学大学文書館委員会名簿

委員長	人文院	副学長	川本 芳昭	委員	比文院	教授	高野 信治
委員	人環院	教授	新谷 恭明	〃	言文院	教授	恒吉 法海
〃	文書館	教授	折田 悦郎	〃	応力研	教授	新川 和夫
〃	法 院	准教授	西 英昭	〃	総理工	准教授	山形 幸彦
〃	人環院	教授	稲葉 継雄	〃	熱農研	教授	黒澤 靖
〃	数理院	教授	森下 昌紀	〃	図書館	館長	丸野 俊一
〃	シ情院	教授	倉爪 亮	〃	博物館	館長	松隈 明彦
〃	芸工院	准教授	北村 賢介	〃	総務部	部長	島村 富雄
〃	歯 院	准教授	筑井 徹	〃	図書館	部長	濱崎 修一
〃	医 院	准教授	倉岡 晃夫				

(2010年6月30日現在)

九州大学大学文書館名簿

館 長	人文院	副学長	川本 芳昭	テクニカルスタッフ		井上美香子
副館長	人環院	教授	新谷 恭明	〃		横山 尊
専任教員		教授	折田 悦郎	〃		市原 猛志
兼任教員	人文院	教授	佐伯 弘次	兼任事務職員	総務課長	倉田佳奈江
〃	人文院	准教授	山口 輝臣	〃	法令審議室長	太田 康治
〃	法 院	教授	植田 信廣	〃	総務第二係長	大野真裕子
〃	法 院	教授	熊野 直樹	事務職員		中村 俊郎
〃	比文院	教授	中野 等	事務補佐員		松尾 陳代
〃	シ情院	教授	荒木啓二郎	〃		筑紫 啓子
専任教員	百年史	准教授	藤岡健太郎			
〃	百年史	助教	陳 昊			

(2010年6月30日現在)

大学文書館日誌抄録 (2010年1月～2010年6月)

- | | |
|---|--|
| 1. 13 (水) TNCテレビ西日本記者、取材のため来館 (九州大学の歴史の件)。 | め来館。 |
| 1. 14 (木) 西日本新聞社記者来館、資料寄贈。 | 2. 6 (土) 折田悦郎教授、大学アーカイヴズ研究会において「九州大学大学文書館」について報告 (於京都大学大学文書館)。 |
| 1. 15 (金) 大学院工学府学生、資料調査のため来館。 | 2. 8 (月) 西日本新聞社より電話取材 (君島武男教授の件。10日も同様)。 |
| 1. 26 (火) 天兎和暢名誉教授来館、資料寄贈。大学院比較社会文化研究院教授、資料調査のため来館。東定宜昌名誉教授来館、資料寄贈。 | 2. 17 (水) 宇都宮大学教育学部准教授、資料調査のため来館。 |
| 1. 27 (水) 牟田敏雄氏来館、資料寄贈。広報室より資料受領。善功企大学院工学研究院教授来館、資料貸出し。 | 神戸大学附属図書館より大学文書館視察のため来館。 |
| 1. 28 (木) 韓国慶熙大学より大学文書館取材のため来館。 | 西日本新聞記者、取材のため来館 (九州大学における「自校史」教育の件)。 |
| 2. 2 (火) 医学部技術専門職員、資料調査のため来館。 | 2. 22 (月) 韓国研究センター第49回定例研究会 (報告：白永瑞延世大学校国学研究 |

- 院院長・史学科教授。折田教授、コメンテーターとして参加)。
 東北大学史料館員、資料調査のため来館(23日も同様)。
2. 24 (水) 白永瑞延世大学校国学研究院院長、大学文書館視察のため来館。
2. 26 (金) 折田教授、福岡市立北崎小学校西浦分校を訪問(閉校式等の撮影打合せのため)。
3. 1 (月) 統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻会議開催(折田教授出席。4月8日、27日も同様)。
3. 4 (木) 大学院人文科学研究院准教授、資料調査のため来館。
3. 17 (水) 柴田篤大学院人文科学研究院長より資料寄贈(31日も同様)。
3. 26 (金) 森祐行名誉教授より資料寄贈。
3. 31 (水) 『九州大学大学史料叢書』第18輯刊行。
 『九州大学大学文書館ニュース』第34号刊行。
4. 2 (金) 福岡市総合図書館より資料調査のため来館。
4. 7 (水) 新採用職員研修「九大の歴史に触れる」(折田教授講演。於旧工学部本館会議室。その後、大学文書館案内)。
4. 16 (金) 大学院芸術工学研究院より資料受領。
4. 21 (水) 2010年度前期「大学とはなにか—とともに考える—」開講。
4. 26 (月) 第12回九州大学大学文書館委員会開催。
4. 27 (火) 古河機械金属株式会社より大学文書館視察のため来館。
 大学院比較社会文化学府学生、資料調査のため来館。
5. 11 (火) 九州共立大学経済学部講師、資料調査のため来館。
5. 12 (水) 「伊都新キャンパスを科学するⅠ」(総合科目)の一環として「九州大学史と伊都キャンパス」を講義(折田教授)。
5. 18 (火) 総務課秘書室より資料移管。
5. 20 (木) 旧制福岡高等学校同窓会青陵会(伊東一義氏、吉増浩氏)より来館、資料寄贈。
5. 22 (土) 全国地方教育史学会第33回大会開催(～23日)。同会「資料見学会」、大学文書館を会場に開催(折田教授説明。23日:同会「公開シンポジウム」。新谷恭明副館長、折田教授、藤岡健太郎准教授、陳昊助教等参加)。
5. 26 (水) 筑紫女学園大学文学部准教授、大学文書館視察のため来館。
5. 28 (金) 大久保敬大学院農学研究教授より資料寄贈。
6. 1 (火) 塩川郁夫氏(元本学技官)より資料寄贈。
6. 2 (水) 布上董名誉教授来館、資料寄贈。
 河原畑勇名誉教授来館、資料寄贈。
6. 16 (水) 竹田津富次名誉教授より資料寄贈。
6. 21 (月) NHK熊本放送局より電話取材(戦前期の医学部写真の件。28日も同様)。
6. 22 (火) 学務部学生生活課より資料受領。
6. 24 (木) アジア総合政策センターより資料受領。
 原稔氏より資料寄贈。
6. 28 (月) 壬子会(工学部土木系教室同窓会)より資料寄贈。
6. 30 (水) 百周年記念事業経理・基金部会開催(折田教授出席)。
 比較社会文化学府等事務部より資料受領。

九州大学百年史編集小委員会名簿

委員長	人環院教授	新谷 恭明	委員	人文院准教授	山口 輝臣
委員	法 院教授	植田 信廣	〃	シ情院教授	荒木啓二郎
〃	文書館教授	折田 悦郎	〃	法 院教授	熊野 直樹
〃	比文院教授	中野 等			(2010年9月1日現在)

九州大学百年史編集室名簿

室長	人環院教授	新谷 恭明	テクニカルスタッフ	横山 尊
専任教員	准教授	藤岡健太郎	〃	市原 猛志
〃	助教	陳 昊		(2010年9月1日現在)
テクニカルスタッフ		井上美香子		

百年史編集室日誌抄録 (2010年3月～2010年9月)

- | | |
|--|--|
| 3. 31 (水) 永江由紀子 (テクニカルスタッフ) 退任。 | 7. 8 (木) 第4回百年史編集小委員会 (写真集請負業者選定)。 |
| 4. 1 (木) 横山尊 (テクニカルスタッフ) 着任。 | 8. 16 (月) 比較社会文化研究院・言語文化研究院・数理学研究院等各教授会議事録撮影 (～9月13日)。 |
| 5. 24 (月) 評議会・部局長会議議事録撮影 (～8月3日)。 | 9. 1 (水) 市原猛志 (テクニカルスタッフ) 着任。 |
| 6. 17 (木) 第6回百年史編集委員会 (平成21年度決算、平成22年度予算、部局史編の編集について等を審議)。 | |

『九州大学百周年記念写真集』に関する写真等を集めています！

九州大学は、来年（2011年）5月に創立100周年を迎えます。そのため前身校を含む九州帝国大学、九州大学に関する写真等を収集しています。下記のような資料をお持ちでしたら、大学文書館までご寄贈、ご貸与くださいますようお願い申し上げます。

- 写真・アルバム
特に戦中期、戦時体制期、昭和20～30年代、同50～60年代の学生生活（学生運動）に関する写真
- 文書資料
会議資料／日記・書状等の個人資料／講座・研究室等の日誌・記録
- その他
卒業証書等／校旗・校章／講義ノート等／記念品／スクラップ／学生運動関係等の資料（ビラ等）／九大関係者・同窓会関係資料

九州大学大学文書館ニュース 第35号

発行日 2010年9月30日（年2回刊）

編集行 九州大学大学文書館

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

Tel:092-642-2292 Fax:092-642-7646

Kyushu University Archives

印刷 株式会社ミドリ印刷